

主 題：五つのパンと二匹の魚**聖書箇所：ヨハネの福音書 6章1－15節**

今朝、皆さんと一緒に見たいのは、ヨハネ6：1－15のみことばです。

皆さんはもし、自分自身には手に負えない、理解できないような問題が目の前に起こったら、どのように応答するでしょう。問題はいろいろな場面で起こるかもしれません。家庭にあって予期せぬタイミングで、健康や経済面で難しさを抱えるかもしれません。職場にあって突然仕事が降りかかり、大きな責任を抱えるかもしれません。学校にあって大変なことがあり難しさを抱えるかもしれません。また、年齢に関係なく、将来に関する重大な責任を負うことがあったりするでしょう。挙げればキリがありません。私たちは日々の生活の中でいろいろな問題に直面することがあります。時に、自分には到底解決できないと、不安を抱いてしまうこともあるでしょう。果たしてそのような時、私たちはどのように問題に向き合おうとしているのでしょうか。

聖書に登場する人物たちも、いろいろな応答をしていました。自分たちの手に負えない同じ問題を前にしても、異なるふるまいをする者たちがいました。たとえば、神様が与えると約束していたカナン之地に入る直前にモーセが送った偵察隊は、帰って来てこのような報告をしました。「カナン之地に住んでいる人たちは、力強く、町々は城壁を持っていて、非常に大きく、絶対に私たちの手には負えません」と。その報告を聞いたカレブという人物は、こう答えました。民数記13：30に「私たちはぜひとも、上って行って、そこを占領しよう。必ずそれができるから。」と。その一方で、偵察隊と一緒にいった者たちや、同じ報告を聞いた民たちは、おびえてこのように口にしました。14：3に「なぜ主は、私たちをこの地に導いて来て、剣で倒そうとされるのか。私たちの妻子は、さらわれてしまうのに。エジプトに帰ったほうが、私たちにとって良くはないか。」と。同じ問題でも別々の応答でした。ほかに、巨人ゴリヤテがイスラエルの軍勢の前に立った時、彼は叫んでこのように言いました。Iサムエル17：10「きょうこそ、イスラエルの陣をなぶってやる。ひとりをよこせ。ひとつ勝負をしよう。」と。その声を聞いたイスラエルの王様や兵士たちの応答は、みんな意気消沈して、非常な恐れを抱いていました。その一方で、まだ若かったダビデは大胆にこう口にしたわけです。「あの男のために、だれも気を落としてはなりません。このしもべが行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」(17：32)と。同じ問題でも全く別々の応答でした。

いったい何がこの違いを生み出していたのでしょうか。もっと言えば、どうすれば私たちも困難な状況を前にして、変わらずに希望を失わずにあり続けられるのでしょうか。その一つの答えをきょうの箇所から見て取ることができます。これから学んでいくのは、言うまでもなく、もうすでに多くの人たちがよく知っている話だと思います。イエス様が五つのパンと二匹の魚によって5千人以上の人たちを養った奇蹟は、教会学校でも何度も耳にした話だと思います。地上での働きにおいて、イエス様はたくさんの奇蹟を行いました。何百、何千もの奇蹟を行いました。そのうちの37個の奇蹟がマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書に具体的に書いてありますが、四つすべてに出てくる奇蹟は幾つあると思いますか。その数は実に一つだけでした。そしてその一つこそ、今回見ていく5千人以上を養った話になります。つまり皆さん、この箇所は有名な一つの話と簡単に片付けていいものではありません。福音書の著者たち全員が触れたイエス様のこの奇蹟のみわざ、ここには私たちが目を留めなければならない重要な真理が記されています。

○五つのパンと二匹の魚：五つの場面

これから私たちが見ていく6章には、どんな時も希望を見出すことのできるイエス様の偉大な姿に加えて、そのイエス様の姿を正しく捉えていなかった人たちの姿がはっきりと描かれています。実際にど

のようなことが教えられているのか、さっそく見ていきましょう。今回 1－15 節を大きく分けて五つの場面から考えてみたいと思います。まずいつものようにみことばをお読みします。

ヨハネ 6：1－15

「1 その後、イエスはガリラヤの湖、すなわち、テベリヤの湖の向こう岸へ行かれた。2 大ぜいの人の群れがイエスにつき従っていた。それはイエスが病人たちになさっていたしるしを見たからである。3 イエスは山に登り、弟子たちとともにそこにすわられた。4 さて、ユダヤ人の祭りである過越が間近になっていた。5 イエスは目を上げて、大ぜいの人の群れがご自分のほうに来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。6 もっとも、イエスは、ピリポをためしてこう言われたのであった。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。7 ピリポはイエスに答えた。「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」7 弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。9 「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。」10 イエスは言われた。「人々をすわらせなさい。」その場所には草が多かった。そこで男たちはすわった。その数はおよそ五千人であった。11 そこで、イエスはパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けてやられた。また、小さい魚も同じようにして、彼らにほしだけ分けられた。12 そして、彼らが十分食べたとき、弟子たちに言われた、「余ったパン切れを、一つもむだに捨てないように集めなさい。」13 彼らは集めてみた。すると、大麦のパン五つから出て来たパン切れを、人々が食べたうえ、なお余ったもので十二のかごがいっぱいになった。14 人々は、イエスのなさったしるしを見て、「まことに、この方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。15 そこで、イエスは、人々が自分を王にするために、むりやりに連れて行こうとしているのを知って、ただひとり、また山に退かれた。

1. 熱狂的な群衆 1－4 節

まず一つ目の場面から考えてみましょう。一つ目は「熱狂的な群衆」です。1 節はこのように始まっています。「1 その後、イエスはガリラヤの湖、すなわち、テベリヤの湖の向こう岸へ行かれた。2 大ぜいの人の群れがイエスにつき従っていた。」と。さて「その後」とは、いつのことを言っているのでしょうか。複雑なことではなく、先週まで見ていた 5 章の一連の流れの後のことです。イエス様はエルサレムの町で 38 年の間、床に伏せていた者を安息日にいやされて、その結果、ユダヤ人指導者たちからいのちを狙われるようになりました。その出来事後、イエス様はエルサレムから北のガリラヤ湖近くへと移動していたわけです。ただし覚えていてほしいことがあります。ここでの「その後」というのは、必ずしも 5 章の出来事があってから数日、数週間後のことを表しているのではないということです。5 章に戻って 1 節を見てください。「その後、ユダヤ人の祭りがあって、……」と始まっています。この「ユダヤ人の祭り」ですが、多くの人たちは、これが 10 月ごろに祝われていた「仮庵の祭り」ではないかと考えています。また 6 章に戻って 4 節を見ていただくと、「過越が間近になっていた。」とあり、この「過越」の祭りは 3 月、4 月ごろに祝われていたものでした。

詳細はわかりませんが、5 章と 6 章の間には、少なくとも数か月から半年、もしくは 1 年ほどの期間があったと言われているわけです。それがなぜ大切なのかと言うと、イエス様はその期間、何もせずにぼんやりしていたわけではありません。イエス様はガリラヤを含めて、いろいろな町や村を巡り、教えたり、病を治したり、悪霊を追い出したりしていました。当時の人たちは、間違いなく毎日ように耳にしていたでしょう。「あのイエスという人の話を聞いたか」、「あの人は、あの町でこんなことをして、あの村でもこんなことを教えて、すごいことをなさっている」、「この人は絶対に、普通の人では

ない」など、イエス様が様々なところでなされていたみわざに対する関心や驚きは、もうこの時点で人々の間に、広く広く浸透していたわけです。

また背景に関してもう一つ付け加えるとしたら、この時、先ほども見た6：4のユダヤ人の祭りである「過越」が間近に迫っていました。この「過越」の祭りをイスラエルの民たちは待っていました。以前にも触れましたが、この祭りはイスラエル人にとっては、非常に重要な意味を持っているものでした。それは、かつてエジプトの地にあって示された神様の恵み、神様の贖いのみわざを彼らが思い出すためでした。昔、羊の血が塗られた家には滅びをもたらさずに、そこを通り過ぎてくださった神様のあわれみ、またエジプトの地から自分たちを救い出してくださったということ、そのすばらしい神様の救いのみわざを覚えて、彼らは毎年のように感謝を捧げていました。しかし同時に、ただ思い出すだけのものではなく、この時期は彼らにとって、大きな期待を抱く時でもあったわけです。何を期待していたのかと言うと、最初の「過越」を導いた預言者モーセが、ある約束を民に与えていたからでした。その約束とは、いつの日か、モーセよりも偉大な預言者が現れるというものでした。申命記18：15にはっきりと記されています。「あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。」と。いつの日かモーセよりも偉大な預言者が現れると、そのような約束を聞いていた民の期待値は、祭りのたびごとに増し加わっていたわけです。モーセよりも力強いことばを語って、今の自分たちをローマの圧制から救い出してくれるような預言者、救世主が、いつか必ずやって来るのだと、彼らはその時を楽しみにしていました。

想像してみてください。期待感にあふれた彼らが、毎日ようにイエス様が語る力強い教えを耳にしていたのです。教えを聞いていただけでなく、水をぶどう酒に変えたり、深刻な病に侵されていた者をいやしたり、足の萎えた者を立たせたりするなど、驚くべき奇蹟を毎日のように目の当たりにしていたわけです。彼らは思ったことでしょう。「このイエスと呼ばれる人こそ、モーセが約束していた人物に違いない」と。だからこそ、イエス様がガリラヤ湖の近くに移動した時、大ぜいの人の群れがイエス様の後について行きました。男性だけで5千人ほど、女性や子供を含めれば1万5千とか2万人とも言われるほどの熱狂的な群衆が、それぞれの町から出て来ては、イエス様の後について行ったわけです。イエス様に対する人気や関心、情熱といったものは、この時、絶頂に達していました。

しかし、ここに大きな問題がありました。それは群衆の動機でした。2節を見てください。「大ぜいの人の群れがイエスにつき従っていた。それはイエスが病人たちになさっていたしるしを見たからである。」と。たくさんの人たちがついて行ったのは、イエス様の教えに感銘を受けて、それを素直に受け入れたからではありません。熱狂的にイエス様について行ったのは、イエス様から救いや罪の赦しを求めたいと思っていたからでもありません。彼らがついて行った理由は、ただイエス様のなされた「しるし」のためでした。彼らはイエス様がだれなのかということに興味や関心があったのではなく、自分のためにイエス様が何をしてくれるのだろうか、そこにしか関心がなかったわけです。確かに彼らは熱狂的でした。しかし残念ながら、彼らの見ていた焦点は、根本的にずれていました。非常に自己本位的だったわけです。

2. 思いやり深いイエス様 5節

そのように利己的な人たちが自分の方に大ぜいやって来るのを見たイエス様は、どのようにふるまわれたのでしょうか。それが次の場面です。二つ目の場面は「思いやり深いイエス様」です。5節を見てください。「イエスは目を上げて、大ぜいの人の群れがご自分のほうに来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。」」と書いていました。押し寄せて来る人たちが、自分を求めているのではなく、自分を利用しようとしていることをイエス様は知らなかったわけではありません。それを知っていてなお、イエス様は彼らを追い払おうとするのではなく、喜んでその必要を満たそうとされました。目を上げて群衆がやって来る様子を見たイエス様が持っていた思いやりやあわれ

みは、非常に深いものだったわけです。その深さは、このヨハネの福音書だけを見ると読み取ることができません。なぜかと言うと、この5千人以上の人たちを養う出来事の直前、イエス様には非常に大きな悲しみをもたらす事件が起っていました。それはヘロデ王様の手によって、バプテスマのヨハネの首がはねられるというものでした。同じ場面が書かれているほかの福音書と読み比べてみてください。ほかの福音書を見れば、その様子を読み取ることができます。たとえば、マタイ14:10-13にこのように書かれています。「:10 彼は人をやって、牢の中でヨハネの首をはねさせた。:11 そして、その首は盆に載せて運ばれ、少女に与えられたので、少女はそれを母親のところに持って行った。:12 それから、ヨハネの弟子たちがやって来て、死体を引き取って葬った。そして、イエスのところに行き報告した。:13 イエスはこのことを聞かれると、舟でそこを去り、自分だけで寂しい所に行かれた。……」と。想像できますか。イエス様にとってバプテスマのヨハネは赤の他人ではありませんでした。ヨハネはイエス様にとっていどこであり、友人であり、自分の道を整えるために働いていた先駆者でもありました。そんな大切な友人が亡くなったという突然の知らせは、イエス様の心に大きな痛みをもたらしたわけです。感情的に傷つき、疲れ果てていました。それだけでなく、肉体的にも疲れ果てていました。マルコ6:31-32を見ると、同じように直前の様子が記されています。「:31 そこでイエスは彼らに、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい」と言われた。人々の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかったからである。:32 そこで彼らは、舟に乗って、自分たちだけで寂しい所へ行った。」とあります。福音を熱心に宣べ伝えていたイエス様と弟子たちは、食事する時間さえありませんでした。いろいろな村を渡り歩いた後、からだは疲れを覚えて、何も口にすることができなかった彼らは、お腹を空かせていました。当然、少しゆっくりと休息を取りたいと願ったでしょう。懸命に働いた後で、少しはのんびりと食事をしたいと思ったでしょう。しかし計画どおりにはいきませんでした。先ほどの続き33節にこのように書かれています。「ところが、多くの人々が、彼らの出て行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ徒歩で駆けつけ、彼らよりも先に着いてしまった。」と。

考えてみてください。もし私たちが同じ状況に置かれたらどうするでしょう。大変な仕事を終えて、少し静かに休もうと思って向かったその場所には、多くの人たちであふれていたわけです。やっと食事ができる舟で思っていたら、岸が近づくにつれ、あちこちから叫び声が聞こえてくるわけです。「私の病をいやしてください」、「私の足を、私の目を、私の腕をいやしてください」と。私たちならどうでしょう。舟に乗っている時に知らん顔して、舟の向きを変えて別の方向へと漕ぎ出すでしょうか。少しは休憩させてくれとイライラするでしょうか。私たちは、自分が元気な時は優しくできたとしても、疲れている時や空腹の時は自分本位になってしまうことがあります。しかし、イエス様が取られた行動は違っていました。イエス様はそのような状態にあった時でも、そんな者たちに対して、深いあわれみを示されたわけです。イエス様は自分の必要ではなくて、人々の必要をどんな時も優先される方でした。その様子がマタイ14:14にこのように記されています。「イエスは舟から上がると、多くの群衆を見、彼を深くあわれんで、彼らの病気をいやされた。」と。また、先ほどの続きのマルコ6:34を見れば、そこにも「イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた。」とあります。良い羊飼いであるイエス様は、羊飼いを持たずさまよっている羊たちのことを放っておこうとはしませんでした。彼らはイエス様ではなく、自分が与えられるものだけを求めていたことを、イエス様はよくわかっていましたが、そんな利己的な人たちに対しても、自ら進んで深い思いやりを示そうとされたわけです。これが私たちとともにいてくださる羊飼いであり、また私たちの模範であるイエス様の深いあわれみの姿でした。

3. 疑い深い弟子たち 6-9節

そんなあわれみ深いイエス様が、弟子たちに尋ねたわけです。5節の後半に「どこからパンを買って来て、この人々にたべさせようか。」と。その問いに対する応答が、次の三つ目の場面になります。三つ目

の場面は「疑い深い弟子たち」です。イエス様の問いに対して弟子たちは答えます。6－9節にこのように書かれています。「:6 もっとも、イエスは、ピリポをためてこう言われたのであった。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。:7 ピリポはイエスに答えた。「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」:8 弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。:9 「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。」と。イエス様は、ここで実際に答えを求めていたのではありませんでした。ご自分が何をしようとしているのか、イエス様はあらかじめ知っていたわけです。しかしあえて、弟子たちの心の内側にあるものを明らかにするために問われました。

一人目に答えたのはピリポでした。彼は「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」と答えました。ピリポは非常に合理的な人物でした。計算するのが得意で、自分の知識を頼りにするような人でした。だからこそ彼は、イエス様に問われた時に、真っ先に頭の中で計算したわけです。「まず、ここからここまでが100人で、それが何百組ぐらいあり、この辺りにある店で買えるパンの値段はこれぐらいだから、少しずつ配ったとしても200デナリのお金では足りません。」と。1デナリは普通の人が働いてもらえる1日分の賃金でした。200デナリだとどれぐらいでしょう。約8か月分に当たる賃金でした。8か月分の賃金を要するほどの大ぜいの人たちが、そこに集っていたということです。その人たちを見て、ピリポは自分の知識に頼りました。自分で計算した答えで物事すべてを判断しようとしたわけです。そしてその結果、これほど大ぜいの人を養うなど絶対にできませんということでした。

二人目に答えたのはペテロの兄弟アンデレでした。アンデレも言うわけです。「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。」と。ピリポとは違って、アンデレは実際に食べ物を探して、イエス様のもとに少年を連れてきました。しかしアンデレも何も変わりませんでした。自分の目の前にあるもの、自分が手にしているものを見て、物事すべてを判断しようとしていました。自分たちとともにいるイエス様に何ができるかではなく、目の前の群衆を見て、少年の持っていた五つのパンと二匹の魚を並べて、勝手に結論づけたわけです。こんなに大ぜいの人を養うなど絶対にできないと。ピリポやアンデレは、イエス様がどのようなお方なのか、何も知らなかったのでしょうか。知らなかったからこのような態度を取ったのでしょうか。いいえ、彼らこそ最初からイエス様の最も身近にいて、その働きを見続けていた人たちでした。ふたりはイエス様に従い始め、イエス様が水をぶどう酒に変えるのも、死にかかった役人の息子をいやすのも、38年もの間、床に伏せていた者を治すのも、その目で見ていました。それだけでなく、イエス様がツアラアトのような深刻な病気に侵されている者をいやすことも、荒れ狂った嵐を何事もなかったかのように静めるのも、死んでいた会堂管理者の娘を生き返らせるといった驚くべき場面を幾つも繰り返し目の当たりにしていたわけです。本来なら彼らこそ、イエス様がどんなに圧倒的な力を持っておられるかを知っていておかしくなかったわけです。自分の手には負えなかったとしても、自分とともにいる主に任せていれば大丈夫だと、確信を口にして然るべき人たちでした。しかし、残念ながら彼らは一番近くにいたイエス様の姿を忘れていました。自分たちの目の前に起こった問題を、自分の知識や計算によって、物に頼って解決しようとしていました。その結果、目の前に映る不可能に思える問題によって、目を向けるべき、すべてを可能にすることのできる方が見えなくなっていたわけです。自分の知恵に頼ることは愚かなことでした。

私たちは、ピリポやアンデレ、弟子たちのことを情けないと責めることはできません。私たちも同じようなことをするわけです。自分には手に負えないこと、理解できないような問題が目の前で起こっていたら、私たちは真っ先にどのように応答するでしょう。ピリポのように、すぐに自分の知識に頼って問題を解決しようとするのでしょうか。アンデレのように、自分の手にあるもの、自分の持っているも

の、自分が確信できるものと問題を比べて、どうしようかと思い悩んでいるのでしょうか。知恵を持って物事を判断することも、与えられたものを賢く使うということも、それ自体が間違っているわけではありません。しかし、常に問われることは、私たちが自分や目の前にあるものに信頼を置いているのか、それとも、いつもともにいてくださる神様の姿に信頼を置いているのか、どちらかです。

多くの場合、私たちが心の内側で本当に信じている神様の姿というものは、自分では手に負えない、理解できない困難な状況に置かれた時にこそ、外側に現れるようになります。それは昔から変わりません。改めて振り返ってみてください。最初に見たカレブやダビデ、またイスラエルの民、彼らの反応の違いは何だったのでしょうか。どちらも置かれた状況は同じでした。目の前には己の力で何もできないような、どうすることもできないような強大な敵がいました。イスラエルの民は恐れたわけです。なぜでしょう。それは、彼らが大きな神様を小さくしていたからでした。彼らは、自分たちの考えに神様を当てはめて、自分たちの目の前の問題を大きくしていました。神様の実際の姿に心を留めていなかったわけです。その一方で、カレブやダビデは勇気を失いませんでした。なぜでしょう。それは、彼らに知恵や力があつたからではありません。彼らは、ただ自分たちが信じている大きな神様をそのまま見ていたからでした。民数記 14 : 8－9 を見ると、一連の出来事の中にあつてカレブは、「:8 もし、私たちが主の御心にかなえば、私たちをあの地に導き入れ、それを私たちに下さるだろう。あの地には、乳と蜜とが流れている。:9 ただ、主にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちのえじきとなるからだ。彼らの守りは、彼らから取り去られている。しかし主が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」と言っています。カレブだけではありません、ダビデも同じでした。I サムエル 17 : 37 で、「獅子や、熊の爪から私を救い出してくださった主は、あのペリシテ人の手からも私を救い出してください。」と言っています。忘れてはいけないことがあります。それは、不可能に思えるような問題の前で、私たちを支えるのは、私たちが持つ知恵や賢さではありません。その時に私たちを支えてくれるのは、私たちが信じている神様の姿でした。自分とともにいてくださる神様が、どのようなお方かを信頼すること、それだけがそのような状態の中で希望を失わない鍵でした。

オズワルド・チェンバースというひとりの信仰者も、このようなことばを残しています。「信仰は自分がどこに導かれているのか知りません。しかし、導いておられる方を愛し、知っているのです。」と。どこに導かれているのかを知ったから希望を見出せるものではありません。導いておられる方を知っているから、私たちはいつも喜ぶことができます。いつもそこに希望を見出すことができます。疑い深かったピリポやアンデレ、ほかの弟子たちも、イエス様の姿を知らなかったわけではありません。イエス様の姿をさらに深く学び続ける必要がありました。私たちも同じです。希望を失う時、思い出すべきことは、私たちとともにいてくださる神様が、どのようなお方かということです。そのことを私たちも学び続ける必要があります。弟子たちはそのことを忘れていました。

4. 余りあるほどの食事 10－13 節

しかし、イエス様はまたそれを教えようとします。その圧倒的なイエス様の持つ力が、まさに次の瞬間、彼らの前で示されていくわけです。四つ目の場面は「余りあるほどの食事」です。イエス様のなさった驚くべきみわざが 10－13 節に記されています。「:10 イエスは言われた。「人々をすわらせなさい。」その場所には草が多かった。そこで男たちはすわった。その数はおよそ五千人であつた。:11 そこで、イエスはパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けてやられた。また、小さい魚も同じようにして、彼らにほしだけ分けられた。:12 そして、彼らが十分食べたとき、弟子たちに言われた、「余ったパン切れを、一つもむだに捨てないように集めなさい。」:13 彼らは集めてみた。すると、大麦のパン五つから出て来たパン切れを、人々が食べたうえ、なお余ったもので十二のかごがいっぱいになった。」と。ある人たちは、イエス様がここで配ったパンと魚を、かごに入った、大きなパンや立派な魚といったイメージを抱いているかもしれません。確かに、絵本や紙芝居やアニメなどでは、そのように描かれていたかもしれませ

ん。しかし皆さんに知っていてほしいことは、ここで出てきているパンは、実際には10～13センチぐらいの小さなビスケットで、この魚は一口で食べられるほどの小魚だったのです。想像してみてください。男性だけで5千人、女性や子供も含めれば2万人にも及ぶ人々の前に少年が差し出したものは、小さなビスケット五つと小魚二匹でした。「こんな小さな、こんな少ないものではだれひとりとして満足することはできません。」と弟子たちが思うのも無理のない状況です。人の目には到底、不可能に思えるような状況でした。しかし、圧倒的な力を持っていたイエス様の前には、もうそれだけで十分だったわけです。イエス様は、感謝を捧げた後、パンと魚を手にとって、そして群衆に分け与え始められました。ひとりが食べて、ふたりが食べて、数十人が食べ、数百人が食べ、数千人が食べました。しかも、ただ食べたわけではありません。11節の最後のところに「彼らにほしだけ分けられた。」と書いていました。つまり、彼らは少しだけ食べたわけではなく、望むだけ食べました。欲しいだけ食べました。小さなビスケットと小魚が、これ以上はもうお腹に入りませんと口にするまで、すべての人たちを満足させていたわけです。残ったものをすべて集めてみれば、12のカゴがいっぱいになっていました。すごいことだと思いませんか。いったいこのようなみわざを、だれがなすことができるのでしょうか。このようなみわざは、造り主であるまことの神様にしか到底できないものでした。そしてイエス様こそ、造り主であり、まことの神様だったわけです。人には不可能に思えることも、御子にはいっさい何の問題もありませんでした。全く足りない、どう考えても少ないものから、余りあるほどの食事を与えることのできたお方、それだけの力を持っておられるお方、それが私たちとともにいてくださる偉大なイエス様でした。すばらしい奇蹟、「しるし」が示されました。

5. 表面的な応答 14－15節

そして最後に五つ目の場面です。五つ目は「表面的な応答」です。14－15節でこのように記されていました。「:14 人々は、イエスのなさったしるしを見て、「まことに、この方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。:15 そこで、イエスは、人々が自分を王にするために、むりやりに連れて行こうとしているのを知って、ただひとり、また山に退かれた。」と。思い返してください。この「しるし」がなされた時、イスラエルの民たちは、「過越の祭り」を間近にし、大きな期待を抱いていたわけです。モーセより偉大な預言者がやって来るのだということを、今か今かと待ち焦がれていました。そのような中で、イエス様の行った驚くべきみわざを、文字どおり味わったわけです。彼らは、間違いなく確信を抱いたでしょう。遂に、遂に、世に来られるはずの預言者が来たと。モーセの時代、民は荒野で天からマナを与えられました。そして今回、イエス様は目の前でパンを与えられました。モーセの時代、民はモーセを通して囚われていたエジプトの鎖から助け出されました。その出来事を覚えていた彼らは、このイエス様こそ、今回、自分たちをローマの鎖から助け出してくださる救世主だと、大きな期待を抱いたわけです。彼らは大いに喜びました。それゆえに、彼らは自分たちの王にしようとして、イエス様を無理やり連れて行こうと考えたわけです。仮に、イエス様が大衆の人気を手にしたいと願っていた人物なら、これは絶好の機会でした。人々の関心も期待も情熱も最高潮にあったこの時、「わたしこそが王なのだ」とイエス様が宣言していれば、賞賛も栄光も容易に手にすることができました。しかし、イエス様はそのようなものにいっさい目を向けることはなかったわけです。仕える者として世に来られたお方は、人からの名誉を受けるよりも、父のみこころに従順に従って、ご自分のいのちをささげてください、まことの救い主でした。

しかし、残念ながら群衆の多くは、この事実に関心を留めようとしませんでした。彼らは、イエス様のことを見て、ただ自分たちの欲するものを与えてくれる存在としか見ませんでした。驚くべき力を持っているイエス様を見ても、その前にひざまずくのでなければ、この方を自分の救い主、主として信じて、すべてをこの方にささげますという態度を取ったのでもありません。彼らは、自分たちの望み、自分たちが欲しい物質的な必要を叶えてくれる救い主としてイエス様を利用しようとしていました。王である

方を、王としてそのまま迎え入れるのではなく、自分の都合の良い、まるでしもべに取り替えていたわけです。彼らの応答は上辺だけのものでした。彼らは、非常に高慢で、表面的な応答をしていました。

ただこれは、彼らだけの問題ではありません。今の時代でも何も変わりません。ある人は口で言うかもしれません。「私はイエス様が救い主で、王であると思います。」、「私にもイエス様の救いや赦しが必要です。」と。しかし、問われるのは、イエス様をイエス様として素直に信じ、受け入れているのか、それともイエス様を自分の都合の良い存在に変えているかどうかです。イエス様とイエス様のことばをそのまま信じ受け入れているのか、それとも、この部分は要りません。この部分は好きです。この部分は嫌いです。この部分は従えません。この部分は従います。そのようにイエス様を都合の良い存在として変えて、受け入れているのかどうかです。ここには大きな違いがありました。考えてみてください。果たして、自分にとってイエス様は都合の良い時だけ、何の問題がない時だけ従うような存在でしょうか。それとも、どんな時も喜んで従っていたい存在でしょうか。自分の歩みは何も変えずに、ただイエス様がくれるものだけを自分の歩みに付け足していこうと考えているのでしょうか。それとも、イエス様こそ自分にとってすべてだと、イエス様によって自分の歩みがすべて造り変えられて、何をにおいてもイエス様がすべての中心だと考えているのでしょうか。

かつて、イエス様自身がルカ 9：23 で、自分についてくる群衆たちに言われていました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについてきなさい。」と。果たして私たちは、日々自分を捨て、従順に王について行こうとしているのでしょうか。それとも、変わらずに自分自身を王として、自分を捨てることもなく、イエス様について行っている気になっているのでしょうか。当時の群衆たちは、イエス様のことを心から求めてはいませんでした。彼らの関心はイエス様自身ではなく、イエス様が与えてくれるものでした。この後私たちは6章を引き続き見ていくわけですが、イエス様はたくさんの人たちに向かって、「わたしがいのちのパンです」と語られます。「あなたたちにとって必要なのは、物質的なパンではなく、永遠のいのちを与えることのできるわたしです。わたしこそがそのパンです。」と語られます。するとどうなったと思いますか。それを聞いた多くの人たちが離れて行きました。イエス様を求めていたのではなく、イエス様が与えてくれるものを求めていた人たちは、本当の弟子ではないがゆえに、離れていくわけです。

果たして今の私たちはどうでしょう。永遠のいのちを与えてくれるパンだけで十分でしょうか。それとも、ほかのものを必要としているのでしょうか。私たちにとって、最も必要な罪の赦しを与えてくれるだけではなく、どんな時もともにいてくださる不可能のないイエス様。この方を手にして歩むこと以上に、私たちにとって喜びはありません。ですから、この主に心を留め続けることです。この主の姿に心を留めて、この主をいつも愛して、この主の栄光を現す者として、今週もともに歩んでいきましょう。